人間であるということ

―― 金森修における境界人間論の意義について ――

若 松　　猛

研究室紀要 第43号 別刷
東京大学大学院教育学研究科　基礎教育学研究室
2017年 7 月

人間であるということ

――金森修における境界人間論の意義について――

若　松　　猛

私が金森修先生の演習に初めて出席したのはミシェル・フーコーの『主体の解釈学』を扱った2010年のことでした。その後、演習の主題はゴシック文学、大学論と毎年目まぐるしく変化していきましたが、ちょうどこの時期、金森先生は『ゴーレムの生命論』を執筆・出版しており、これらの主題の多様性がすべて「人間」というものの輪郭を、その境界線を描くという仕方で浮き彫りにするためのアプローチだったように思われます。ときには人間の外側の存在に定位しながら、ときには人間の理性、道徳、そしてこれらが結実したものである制度に目配せしながら、とはいえ人間の側にのみ定位していたのでは見過ごされてしまうその限界を慎重に見定めていたのではないでしょうか。以下、金森先生の業績の中で、この時期の思索がどのように位置づけられるのかを確認したく思います。

金森先生の業績は、『バシュラール――科学と詩』をはじめとしたフランス思想研究から『サイエンス・ウォーズ』を中心とした科学認識論、さらには生命・医療論、そして『ゴーレムの生命論』と『動物に魂はあるのか』で展開されたいわば「境界人間論」に大別され、発表・書評などを除けば概ねこの順序で論じられています。その後、『エピステモロジーの現在』にはじまる科学認識論についての数冊の編著、『科学の危機』に結実する科学認識論の科学技術社会論に基づく批判的検討へと続いていくことになります。このように多岐にわたる業績を通覧したときに、金森先生自身が『科学の危機』の中で書いているとおり、科学認識論についての関心が常に中心にあって、そこから拡がっていることは間違いないでしょう。そうであるならばなおのこと、後期に科学認識論を改めて論じるとき、生命・医療論や「境界人間論」を経由することでかつての議論から何が変わって何が付け加わったのかを考えることには意味があるのではないでしょうか。

そのためには、『ゴーレムの生命論』(2010年) と『動物に魂はあるのか』(2012年) の間に見られる思想上の進展を確認するのが良いでしょう。両著作はともに「境界人間論」を取り扱っているといえるものですが、前者と後者では対象に対する距離のとり方が明らかに異なります。勿論、ゴーレムという架空の存在に対する態度と、動物という実際に私達の身の回りにいる存在への態度とは、異なっていて当然です。私がここで言いたいのは、金森先生が様々な場面で繰り返しおっしゃっている自身の「観察者」的なスタンスから、それを踏まえた上で自身の現実に対するコミットメントを表明していくスタンスへの変化のことです。

言うまでもないことですが、金森先生が自らを「観察者」とおっしゃるときに、対象やそれについて記述する自らの態度を全く中立的なものにできると考えていたわけではありません。むしろ反対で、主題の決定、観察対象の選定、記述の方法など、ありとあらゆるものが自らのコミットメントを浮き彫りにすることを強く自負していらっしゃいました。『ゴーレムの生命論』のなかで行われているのは、ゴーレムそのものについての規定ではなく、「ゴーレム的なもの」についての広範な探求です。ユダヤ教に登場するゴーレムという存在が、その後どのように拡散していき、どのように受容されていくのか。このような観点から「ゴーレム的なもの」に着目することには、先生は道理があるとおっしゃいます。「なぜなら、過去、そして現在のユダヤ教内部においてだけではなく、我々が生きる現代社会一般の中でも、この〈ゴーレム的なもの〉は多様かつ複雑な文脈の中で微妙に顔を変えながら出現し続けているという事実があるからだ」(13頁)。とはいえ、ゴーレムをめぐる諸表象に対する観察は、先生自身のまた別の関心に導かれていることも確かです。「ゴーレムを語るということは、いのちを語ることであり、同時に人間を語ることでもある。結局、それは一種の人間論につながっていく。〈人間未満の人間〉のことを考え

るということは、結局、人間そのもののことを考えることなのだ」(10-11頁)。同書の主題はあくまで「ゴーレムの生命論」であって、人間そのものについて真正面から論じられているわけではありません。とはいえ、ゴーレムの諸表象について「観察者」として何かを語ることが、人間についても同じく何かを語ることになると先生が考えていたことは間違いありません。ゴーレムの諸表象を蒐集して哲学的に論じる際、それはまさしく人間への関心に導かれているのです。しかし、だからといって、同書の中で、人間とはいかなるものでかくあるべきであるという積極的主張に類するものは、一度も出てきていません。あくまで、ゴーレムの諸表象をめぐる哲学的考察が展開されるのであって、人間そのものについてはその背後に浮かび上がらせるという形にとどめています。それがまさしく、『ゴーレムの生命論』における先生の「観察者」としてのあり方なのです。

『動物に魂はあるのか』でも、あくまで動物という対象を通して人間像を浮かび上がらせるという点で、その姿勢は基本的には変わりません。しかし、ゴーレムとは違って人間と同じく現実世界で生きる動物について語る以上、少なくとも人間が動物をどう捉えているのか、動物に対する人間の観点そのものについて語る必要が出てきます。

> 人間は愚かで悲しく、無様な存在だ。だが同時に、人間は崇高で美しく、心を衝き動かされる存在でもある。「宇宙の栄光にして、宇宙の屑」——この不可思議にして愛おしい人間のことを考えたいからこそ、本書では少し回り道をしよう。それでも、迂回路にいる最中でも、絶えず人間のことが気遣われているということが、読者には分かるはずである。(10頁)

人間未満の存在について語るということを通して人間について語るという姿勢は、『ゴーレムの生命論』の中にも度々現れていました。ところがここでは、それ以上のことが書かれています。先生自身が書いているとおり、ゴーレムと動物との違いは、前者は「人間未満の人間」であって現実には存在せず、後者は「人間未満の生物」であって現実にありふれたものということです。だからこそ、動物について語るということは、動物と関わり何かしらの価値判断を下しながら生きる人間について語らざるをえないことになります。同書で展開される〈動物機械論〉と〈動物霊魂論〉についての議論は、動物そのものの実在的なあり方についての議論ではありません。人間が動物をどのように捉えているのかという、人間の観点・価値判断についての議論に他ならないものです。同書においては、〈動物機械論〉と〈動物霊魂論〉を思想史的に整理した後、これらが現代の人間社会でどのような射程をもつのかが論じられています。前者はいわば極論として歴史の中で影響力を失っていきますが、後者は最終的には人間と動物の連続性と断絶という形での議論へとつながっていきます。人間社会における差別は、〈人類〉という種の中で〈反差別〉へと向かって解消される方向に進められますが、動物との間には歴然として〈種差別主義〉があり、人間と動物の間にある〈動物障壁〉とでもいうべきものに突き当たることになる、というものです。この〈動物障壁〉とは人間があくまで人間中心の価値観を持っていることの証拠であって、同時に動物まで視野に入れた場合の〈反差別〉の「倫理意識の限界点」です。そして、正義感に満ち溢れた人であればあるほど、「むしろその人は、その限界点である種のうしろめたさを味わうものなのだ」(234頁。強調原文)といいます。

金森先生はここで一旦、「そしてこれが、観察者的なスタンスで世界に関わる傾向のあるこの私が、この問題でいいうる結論めいたことの一つになる」(235頁)という形で話をまとめます。『ゴーレムの生命論』における「観察者」としての態度よりも、人間の倫理に直接言及しているという点で、明らかに進んだ態度をとっているということができます。ただしここでは、「うしろめたさ」という形で、〈動物障壁〉に直面して生じる人間の感情を記述するのにとどめていることには注意しなければなりません。ここまでならば、前著との相違は、単に対象の相違によって導かれたものであるということもできるでしょう。しかし、同書ではさらに進んだ結論が用意されています。

> 先に私は、我々誰もが〈種差別主義〉から完全に脱却はできない、と述べた。我々の誰もが、最終的には人間が一番大事だ、と心のどこかで考えている。にもかかわらず、それは他の生物に対して何をしてもいいということにはならない。「人間が大切だ」と思えるのは、たいていの

人間が、他の生物のことを時に思いやり、無駄な虐殺や虐待を嫌がると思える心を持っているからこそである。(241頁)

これは先の、〈動物障壁〉に直面したときに湧き上がる感情を反復して書いたものではありません。現代における巨大化した畜産業などは動物機械論の現代的変奏であって、それに抗する現代的な動物霊魂論が要請されていると先生はおっしゃっています。「人間が一番大事だ」という感情の根底には、同時に、他の生物にたいして差別的な態度をとったときに生じる「うしろめたさ」というかたちで現れるような感情、言い換えるならば「他の生物のことを時に思いやり、無駄な虐殺や虐待を嫌がると思える心」があります。そして、他の生物が持ちえないようなこうした倫理規範を持っているからこそ「人間が大切」なのです。

金森先生自身がこういう言い方をするかどうかはわかりませんが、この進展はいわば、「人間とは何か」ということをその輪郭をなぞっていくような規定の仕方から、「人間であるとはどういうことか」をより積極的に規定していく仕方への進展ということができるのではないでしょうか。先生自身がおっしゃるとおり、同書が思想史研究であることは確かなことです。ただ同時に、「観察者」として自らが立つ地点、すなわち、「人間であること」そのものについての解明へと研究を深化させていったように私には思われます。2011年のゴシック文学についての演習のなかで、「こんなことをやっている場合ではなくて、震災とか原発事故とかそういう巨大な災害の前ではもっと大事なことがある」ということを先生は何度もおっしゃっていました。震災の衝撃については『動物に魂はあるのか』のあとがきにも触れられていますが、とはいえ先生が『ゴーレムの生命論』に見られるような境界人間論を捨て去ってしまったようには、私には思えません。先生はもともと、『ゴーレムの生命論』のあとに人形論についての執筆を準備していらっしゃいました。人間が人間の形をしたものを造り上げるという営みを、物語から日常世界へと拡げて考察するという仕方で人間と非人間の境界線を引くという道も、確かにありえたでしょう。しかし先生はそうはせずに、『動物に魂はあるのか』の執筆へと進みました。人間自身が創造した人間の似像から、人間が何かしらの仕方で価値判断を下しながらかかわらざるをえない動物へと、対象が大きく変わりました。輪郭を描くという仕方で人間を規定するという方向性自体は変わっていませんが、震災の衝撃を経たあとで、人間が直面する世界そのものと人間のかかわり方を、より強く考えるようになったのではないでしょうか。

先に述べた『サイエンス・ウォーズ』を中心とした初期の科学認識論研究から『科学の危機』に至る直近の研究への進展は、まさしくこの変化と対応するものです。いわば、科学認識論を中心とした捉え方から科学社会・文化論を中心とした捉え方への転換です。認識論的な問題圏から認識主体とそれを取り巻く社会の道徳の問題への進展は、同書の中では〈科学の中立性〉といった神話の崩壊と結びつけながら語られています。しかしこの進展は、科学論内部の議論によって構築された人間観だけによるものではなく、境界人間論に関する二つの著作を経て準備されたものであって、震災の経験がそれを方向づけたということができるのではないでしょうか。

(トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学博士課程)